

研 究 報 告

令和 8 年 3 月 25 日

公益財団法人 前田記念工学振興財団

理 事 長 岸 利 治 殿

研究代表者

所 属 : 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻

氏 名 : 海野 聡

研究課題名 : 木造建築文化遺産の保存の理念と実践に関する日欧比較

助成金額 : 100 万円

研究実施期間 : 自 令和 7 年 4 月 1 日 ~ 至 令和 8 年 3 月 31 日

木造建築文化遺産の保存の理念と実践に関する日欧比較

A Comparison of Europe and Japan on the Principles and Practices of Preservation of
Cultural Heritage of Wooden Structure

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻 准教授 海野 聡

（研究計画ないし研究手法の概略）

本研究は、木造建築文化遺産の保存理念と実践について、日本とヨーロッパを比較することにより、その差異と共通性を明らかにし、文化遺産概念における木造建築の位置づけを再検討することを目的とするものである。とりわけ木造建築は、石造建造物とは異なり、定期的な更新や補修を前提とする点に大きな特徴があり、その維持管理には独自の保存理念と実践が形成されてきた。本研究では、このような木造建築特有の修理体系に着目し、理念と実務の双方から包括的に分析を行う。

研究手法としては、第一に文献調査を基盤とし、日本における木造建築修理の体系的理解を整理する。日本については、既往研究および修理工事報告書の分析を通じて、修理理念の歴史的変遷と制度的背景を把握する。特に、建築部位ごとの修理方法の差異や、技術継承の仕組み、材料調達の実態といった観点から、修理実践の具体像を抽出する。

第二に、ヨーロッパにおける木造建築文化遺産の保存理念と実践を明らかにするため、現地調査および聞き取り調査を実施する。対象地域としては、都市木造建築の事例としてイギリス・ヨーク、民家の保存事例としてフォークミュージアム、宗教建築として北欧の木造教会群を取り上げる。これにより、建築種別ごとに異なる保存理念と修理方法を把握し、木造建築に対する認識の幅を検討する。また、比較対象として石造文化遺産が卓越するノリッジにおいても調査を行い、同一地域内における木造と石造の保存理念の違いを明確化する。

第三に、比較分析の枠組みとして、①建築部位ごとの修理理念、②伝統技術の継承のあり方、③木材や植物性材料の確保方法、の三点を設定する。部位別の視点では、屋根葺材のような更新性の高い部分と、構造体としての軸部のような長期的維持を前提とする部分とを区別し、それぞれに適用される修理理念の差異を検討する。技術継承については、職人組織や教育制度、修理現場と学術との関係性に着目する。さらに材料確保については、森林資源の管理や伝統材料の供給体制といった持続可能性の観点から分析を行う。

第四に、これらの調査結果をもとに、ヨーロッパにおける木造建築と石造建築の保存理念の比較を行う。ヨーロッパでは文化遺産の保存理念が石造建築を中心に形成されてきた経緯があるため、木造建築の修理がどのように位置づけられているかを検証することが重要である。そのうえで、日本とヨーロッパの木造建築文化遺産の比較を行い、木造建築が国際的な文化遺産概念の中でどのように理解されうるかを考察する。

本研究の特徴は、修理理念の理論的検討に加え、実際の修理現場に基づく実践的知見を組み合わせて分析を行う点にある。研究者自身が木造建築の修理現場に関与した経験を有していることにより、理念と実務の乖離や接点を具体的に捉えることが可能となる。このようなアプローチにより、従来は十分に比較検討されてこなかった日欧の木造建築文化遺産の保存体系を立体的に把握する。

以上の方法により、本研究は、木造建築文化遺産に関する保存理念の多様性を単なる地域差として捉えるのではなく、その背後にある歴史的・社会的条件を踏まえて体系的に整理し、国際的な文化遺産保護の枠組みに新たな視座を提示することを目指すものである。

（実験調査によって得られた新しい知見）

1. 日本の木造建築の継承理念

日本の木造建築の保存理念は、物質の保存を絶対視する近代的な文化財概念とは大きく異なり、「継承」という時間的連続性を重視する点に本質的な特徴がある。これまで、現存建築の調査および過去の修理工事報告書の分析、さらに文献史料や発掘遺構の検討を通じて、前近代における修理手法とその背後にある思想を実証的に明らかにしてきた。その結果、日本の木造建築においては、建築を固定的な物体としてではなく、更新や再生を内包した動的な存在として捉える理念が一貫して存在していたことが確認された。

まず、修理手法に着目すると、日本の木造建築では部位ごとに異なる時間概念が適用されていることが明らかとなる。屋根葺材のように短周期で更新される部分と、軸部のように長期的な維持を前提とする部分とが明確に区別され、それぞれに応じた修理方法が採用されてきた。すなわち、建築は単一の時間軸で保存されるものではなく、複数の時間層の重なりとして維持される。このような多層的時間観は、物質的同一性よりも機能的・象徴的連続性を重視する日本独自の保存理念を支えている。

この点は、文献史料に見える維持管理規定の分析からも裏付けられる。前近代においては、建築の長期的な維持を前提とした計画的メンテナンスが制度として存在しており、単発的な修理ではなく、継続的な手入れの積み重ねによって建築が存続していた。さらに、発掘調査によって確認される改造や修理の痕跡は、建築が歴史の中で絶えず変化し続けてきたことを示しており、現状維持を理想とする近代的保存観とは異なる動態的な保存のあり方が実証される。

こうしたこれまでの実証的研究を踏まえ、本研究では日本の木造建築の保存理念の特徴を大きく三つの観点から整理した。第一に、「物質的継承に依存しない継承観」の存在である。従来の建築史は、新築や意匠の変遷といった物質的側面に重きを置いてきたが、本研究は、物質の連続性を必ずしも伴わない継承のあり方を含めて建築の歴史を再構築した点に意義がある。例えば、神社建築における式年造替は、定期的な建て替えを前提としながらも、儀礼や形式を通じて同一性を維持する典型例である。一方で、寺院建築は様式史的に理解されてきたが、災害後の再建においては、理念的には式年造替と同様の再生の思想に基づいていることが明らかとなった。これにより、従来は異なるカテゴリーとされてきた神社建築と寺院建築が、共通の継承思想の上に成立していることが示された。

第二に、「環境との相互関係に基づく保存理念」である。木造建築の維持には木材供給が不可欠であり、その背後には森林資源の管理が存在する。本研究では、木材の供給（川上）と使用（川下）の両面から分析することにより、人間と森林との関係の歴史的変遷を明らかにした。古代における大規模造営によるヒノキの大量消費、中世における資源枯渇と樹種転換、近世における育林の進展といった過程は、建築と環境が不可分の関係にあることを示している。さらに日本では、木材を単なる資源としてではなく、木取りや節の位置といった細部に価値を見出し、それを文化的意味へと昇華してきた。このような木の文化は、日本の木造建築の保存理念を特徴づける重要な要素であり、環境史的視点からも大きな意義を持つ。

第三に、「柔軟で非固定的な文化財保護観」である。近代以降に導入された文化財保護制度は、西欧の石造建築を前提とした理念に基づいており、物質的真正性の維持が重視される傾向にある。しかし、日本の伝統的な保存理念においては、更新や改変を含む多様な継承方法が許容されてきた。本研究は、こうした伝統的理念を再評価することにより、現行の文化財保護の枠組みの限界を指摘する。特に、発展や拡大を前提とする進歩主義的な歴史観に対し、縮小や撤退を含む持続的な維持のあり方を提示した点は重要である。建築の寿命を延ばすためには、必ずしも原状維持を目指すのではなく、状況に応じた柔軟な対応が求められるのである。

さらに本研究は、建築の保存を単なる技術的問題としてではなく、人間の営為の蓄積として捉える視座を提示する。木造建築の継承は、個々の修理行為の積み重ねによって成立しており、その過程には常に判断と選択が伴う。したがって、保存理念を固定的な規範として捉えることは、むしろ継承の本質を損なう危険性を孕む。重要なのは、過去の手法を参照しつつも、それを絶対化するのではなく、個々の建築に即して問い続ける姿勢である。このような動的な思考こそが、日本の木造建築の保存理念の根幹を成している。

以上のように、日本の木造建築の保存理念は、①物質に依存しない継承観、②環境との相互関係を前提とした持続性、③柔軟で非固定的な保護観、という三つの特徴によって構成される。これらは相互に関連しながら、建築を時間の中で生き続ける存在として捉える包括的な思想体系を形成している。この理念は、近代的文化財保護の枠組みを再考するうえで重要な示唆を与えるものであり、国際的な文化遺産保存の議論に対しても新たな視座を提供するものである。これらの整理をもって、西欧における木造文化遺産の

2. 西欧における木造建築の現地調査及び修理理念

本研究では、西欧における木造建築文化遺産の保存理念と修理手法を明らかにするため、ドイツおよび北欧を中心に現地調査を実施した。主な調査対象として、シュバルツバルト野外博物館、ネルトリンゲンおよびディンケルスビュールといった中世都市、デトモルト野外博物館、ハーゲン野外博物館、さらに北欧ではリレハンメルマイハウゲン野外博物館（図1）、ボルグンドおよびウルネスのスターヴ教会（図2）、スカンセン野外博物館などを取り上げた。これらの多様な事例を通じて、西欧における木造建築の保存理念は、日本とは異なる歴史的・文化的背景のもとで形成されていることが明らかとなった。

まず顕著な特徴として挙げられるのは、「当初材の保存を重視する傾向」である。調査対



図1 リレハンメルマイハウゲン野外博物館



図2 ウルネスのスターヴ教会

象の多くにおいて、木材の腐朽が比較的少なく、建築当初の部材が良好に維持されている事例が多く確認された。この背景には、オークや松といった耐久性の高い樹種の使用に加え、気候条件や維持管理の方法が影響していると考えられる。特に軸部に関しては、部材の全面的な取り替えは少なく、部分的な補修にとどめる傾向が強い。この点は、必然的に部材の更新を前提とする日本の木造建築とはことなるが、日本でも軸部などはなるべく当初材の保持に努めており、日欧ともに物質的真正性の保持が重要視されていることを示している。

一方で、屋根葺材のような更新性の高い部位については、日本と同じく一定の周期で葺き替えが行われており、機能維持のための更新が認められている。薄板を用いた屋根では、葺き替えが繰り返されており、これらの部位は消耗材として明確に位置づけられている。ただし、日本に比べると更新の頻度や範囲は限定的であり、可能な限り既存材を維持する姿勢が優先される。このように、西欧の木造建築においては、部位ごとの修理の考え方は存在するものの、全体としては当初材の保存を基調とする理念が貫かれている。また過去の形状へ戻す「復原」という行為も確認できる。

さらに重要な特徴として、「形態の不完全性の許容」が挙げられる。多くの事例において、建築の軸部に生じた歪みが修理によって補正されることなく、そのまま存置されている。結果として、柱や梁は必ずしも水平・垂直を保たず、後補の建具などが部分的に整形されることで使用が継続されている。このような状態は、一見すると不調和にも見えるが、修理履歴やオリジナルの部材を尊重する姿勢の表れと解釈できる。すなわち、西欧の保存理念においては、建築の幾何学的な正確性よりも、歴史的痕跡の保持が優先されるのである。

もっとも、このような歪みの存置は普遍的な原則ではなく、地域的条件に応じた選択である可能性も指摘できる。巨木を得ることができなかった可能性や地震などがほとんどなく、地盤の沈下後も解体することなく、維持してきた可能性など、さまざまな要因がうかがえる（図3）。したがって、当然ながら、西欧における木造建築の修理手法は、単一の理念に基づくものではなく、地理的・環境的条件と密接に関係しながら多様に展開しているといえる。

また、西欧の木造建築保存において特筆すべき点として、「野外博物館の存在」が挙げられる。ドイツや北欧各地に見られる野外博物館では、歴史的建造物が移築され、地域ごとの生活文化とともに展示されている。これらの施設では、建築単体の保存にとどまらず、農業や手工業といった生業を含めた総合的な文化の再現が重視されている。そのため、必ずしも文化財修理の厳格な理念が最優先されるわけではないが、中世に遡る建築も含まれており、一定の慎重な修理が施されていることが確認された。

ただし、移築という手法は、建築の本来の場所性を切り離すものである。日本においては、伝統的に移築が行われていたが、西欧における移築は野外博物館が主であり、やや趣を異にする。この点から、移築は伝統的手法というよりも、近代以降に成立した文化遺産概念に基づく保存技術の一つと位置づけることができるのではなかろうか。スカンセン野外博物館に代表されるように、北欧では早くからこの手法が採用されており、木造建築保



図3 歪んだままの木造建築（ウルム）

存の一つのモデルを形成している。

さらに、西欧においては、木造建築の保存が学術研究と必ずしも密接に結びついていない点も重要である。修理技術者の組織や博物館による保存活動は存在するものの、日本のように学術研究と現場が一体となって体系的な修理理念を形成している状況とは異なる。その結果、個別事例ごとの実践が蓄積されている一方で、それらを統合する理論的枠組みは十分に整理されていない。このことは、西欧の木造建築保存が未だ発展途上の研究分野であることを示している。

以上の調査結果から、西欧における木造建築の保存理念は、①当初材の保存を重視する物質中心的な志向、②歪みや不均質性を含めた歴史的痕跡の尊重、③地域的・環境的条件に応じた多様な修理手法、④野外博物館に代表される移築保存の展開、という特徴を有することが明らかとなった。これらは、日本の木造建築に見られる更新を前提とした継承理念とは共通点・相違点を確認できる。

このように、西欧の木造建築保存は、物質的真正性の維持を重視しつつも、地域ごとの実践に委ねられた多様な体系として存在している。その理念は必ずしも明文化されていないが、個別事例の蓄積を通じて形成されてきたものであり、日本の視座から再検討することで、その特徴と課題をより明確に位置づけることが可能となる。

（ 発 表 論 文 ）

論文（日英、国際会議発表を原稿化）

- ・ UNNO Satoshi “Value of Archeological Reconstruction and “Reconstructionology” , “ Conservation and Interpretation of Archaeological Sites and Authenticity: Approaches to 'Reconstruction' through Asia's Diverse Practices and Rationales” ACCU,2026

国際会議発表

- ・ UNNO Satoshi ” Archaeological Reconstruction and Authenticity” , “Anastylosis at Large Reconstruction - Restoration - Restitution Cultural Divergences & Convergences” The University of Tokyo,2025 年 11 月 1・2 日
- ・ UNNO Satoshi ” Cultural History of the Inheritance of Japanese Architecture” the Sainsbury Institute for the Study of Japanese Arts and Cultures Workshop, Royal Asiatic Society,2025 年 7 月 11 日